



教育・学 ぶ

親子の関わり見直しを

就労支援との区別も必要

10

平均年齢が30歳を超え、長期化・高齢化が深刻化する引きこもり。大人になったわが子の行く末を心配しながらも、解決の糸口を見いだせない高齢の親たちは多い。当事者や保護者を支援するNPO法人「KHJとちぎベリー会」の斎藤三枝子理事長に、問題の根底や支援の課題を聞いた。

「長期化・高齢化の問題点は、
「長引けば長引くほど社会が怖くなります。社交不安障害や強迫性障害、うつなどの二次障害も出て、回復が難しくなります。先日、60代の当

開かない扉

とちぎ・長期化する引きこもり

KHJとちぎベリー会 理事長インタビュー

「事者から電話相談がありました。そこでも高齢の人は想定していませんでした。どうしていいの、戸惑っています」「親もいつまでも元気でいられるとは限りません。」



「当事者が自分だけで生活することは難しいでしょう。生活保護や年金の手続きすらできない人が多いのでは。子どもが親の死後も親の年金を受け給し続けていたという事件が時々報道されます。こうした事態と全く関係がないとは言えないような気がします」

「要因はあるのでしょうか。」「発達課題をクリアせずに来てしまい、問題が起きたとき乗り越えられないのです。自分を確立してこなかったのが最初の原因ではないでしょうか」

「親子関係の問題です。」「いろいろな原因がありますが、親子関係は大きいと思います。引きこもる子は従順な子が多いです。30代の子たちの親は成功体験が多い世代。

子どもたちも自然と同じ価値観をすり込まれていくので放置しがちです。しかしこの段階に入ると、回復に非常に時間がかかります。子どもと関わり続けることが大切です」

「行政の取り組みについては、
「引きこもりにとって、社会のハードルは想像以上に高い。今は若年無業者の就労支援と一緒に考えていますが、区別して考えなければ。家族は体裁を気にし、声を上げない場合も多く、行政が手を出しづらいのも事実でしょう。問題を抱える人が大勢いると周知して、声を上げやすくしてもらうことが支援の第一歩だと思います」

（この企画は阿久津信子が担当しました）

さいとう・みえこ
那須塩原市出身。2002年12月、任意団体として、KHJとちぎベリー会発足時に会長就任。09年9月、NPO法人化で理事長。日本カウンスリング学会認定カウンセララー。64歳。